

多賀台 奈良 孝次郎

## 3. 〈生活の厳しさがつづいた〉

飢饉とともに、犯罪が発生しました。中には、数人の集団で家をおそい、金や米を盗みだし、抵抗すれば殺したり、放火したりするようなこともありました。世の中が物騒で隣の村へも一人では歩けない状態になっていました。

五戸代官所では、犯罪に厳しく対処することとし、犯罪者を捕らえてかます(吠)に入れ、奥入瀬川に流すことにしました。つまり死刑で、これを「かます扱ひ」といいます。盗賊団を捕らえて実際に行いましたが、ひとつのかますが川を泳ぎ、あまりのも不思議なことなので、その男だけ助けました。このことは本当の話で、吉田家文書(六戸)にも出ています。その後も飢饉は続き、不作が終わったのはやっと天保10年(1839)になってからです。

## 4. 〈現代でも飢饉はあるか〉

農業は自然を相手にする産業なので、どうしても気候に左右されます。だから現代でも不作はおこります。平成5年(1993)はそんな年で、青森県の米の作況指数は、平年作の100に対して28、それも、津軽の45に対して南部はわずかに1でした。当時、市川の田んぼを歩いたところ、実りの秋のはずが、青立ちしたイネばかりでした。

結局、米不足になった日本は、外国から米を輸入してしのぎました。江戸時代は封建制度なので、米や麦の移入はできず、多くの人々が餓死したのです。つまり、政治制度によるので、現代でも政治による不作餓死は発生するのです。「市川日記」で「飢饉によって多くの人々が死ぬのは政治のせい」と書いています。(了) 参考:「百石町誌」



## 石碑をたずねて⑥

## ★ 「二宮金次郎」像

轟木下 木村 隆一

- |       |  |
|-------|--|
| 1. 場所 | 八戸市立多賀小学校(松山龍彦校長)：八戸市大字市川町字古館 30-1                             |
| 2. 名称 | 「 <b>至誠報徳</b> 」  |
| 3. 意味 | 真心をもって事に当たれば、徳によって報いられる。                                       |
| 4. 内容 | 二宮金次郎(尊徳=通称:ソントク)が背中に薪を背負い、歩きながら勉強している姿。                       |
| 5. 由来 | 「野口幸吉」氏(旧市川村の村長=大正12年6月~昭和3年4月と、昭和6年3月~10年3月までの約9年間在任)が寄贈したもの。 |

6. 思い 二宮金次郎は、江戸時代の末期に小田原に生まれ、両親を早く失うと共に、天保の飢饉に遭う等大変苦勞するが、生家の再興や多くの村々を立て直し、今で言う「地域づくりの先駆者」であったとも言える。時は、「市川日記」が書かれた時代である。

彼は、勤勉・質素・向学・親孝行などの象徴であったが、これらは、いつの時代においても大切なことである。

現在、八戸市内の小学校では、中居林小・三条小などで二宮金次郎の像を確認することができたが(まだあると思う)、市川町の多賀小学校に立派な像が保存されているということは、子どものためにも、地域のためにも大変有意義なことであると思っている。

参考:「轟木小学校創立100周年記念誌」

(写真と文章:木村隆一)







